

可觀小説卷十九

一、渡邊勘兵衛と村上次郎左衛門

渡邊勘兵衛法跡して號推庵。數度の軍功ありて器量骨柄人前よく、才智深く恐敷俊人也。御旗本の内村上次郎左衛門は御家の村上小七郎父也。此人活氣にて島原一揆の時、射手の大將を被仰付候様に望たる人也。扱推庵此人を殊の外譽立て、武道に於ては古今に秀で、戰國に生れたらば過分に立身をもせんなど、世間に吹擧す。次郎左衛門大に悦びて、渡邊推庵程の士は日本始りて以來有之間敷候と云。相互に褒稱する内に、次郎左衛門は大有德者にて、諸大名へ出入し推庵をほむ。依之推庵名高く、自然と江戸中の浪人頭となる。推庵大利を得て一生富有にて崇敬せられて死たり。次郎左衛門は金銀次第に散失、旗本中にて浪人間屋と悪口せられ、御前躰も不宜終り悪し。嶋原射手大將を望まれ候時、御老中酒井雅樂頭聞て、其方は何の役儀被動やと問はれて、御納戸を勤候と答へければ、雅樂殿御納戸方無相違様に可被勤候。上には御人澤山にて御事欠けなく候。其方を御頼は被

成まいと、殊の外不首尾也。其時節人の申すは渡邊は村上をほめて身を立て大利を得、村上は渡邊をほめて畢竟大損を得。得失大違といふ。輕薄もの、戒めに記之。開原記

一、宇喜多秀家遠流に御供の人々

宇喜多秀家八丈島遠流、父子三人。家臣の儀は大は無用、小臣は誰にても可遣と被命。其故常に念頃に被取立候は大に付不成、小臣は常に厚恩もなければ可參と云ものなし。漸くに二三百石取候者拾八人、御供可仕と誓上たり。是等も常に御厚恩は無けれども、譜代の主君難見拾いつく迄も可奉從と云ふ。新參者に厚恩請たる者あれども不願。秀家平生人を不見知。中村次郎兵衛と云者勝手の圖り上手にて、金銀を取上る事のみ工夫す。此者恩賞深く蒙れども義理を不知、中々供せんとも不云。今此時に臨て行當り御供可仕と義理を立る拾八人へ禮を被申、後悔不大形。拾八人の者共只今切腹いたす事は最易し。父母妻子に今生の別れ、切腹よりは遙に迷惑なれども、主君を難奉見捨といひたりと、彼家の老人芳賀宗惠常に話す。扱八丈島へ二番目御息の乳母、是は澤崎兵太夫澤崎兵太夫母の事也。此等都合二十二人

渡海也。中村次郎兵衛聚斂を事とし、國中へ過役をかけ金銀を取集む。譜代の家老才川肥後守、花房志摩守、喜多右京長船越中等、皆次郎兵衛と中惡敷、四人とも家康公へ出奔す。但長船一人は不行。次郎兵衛後に加州へ罷越し、中村刑部と云。傳別頭人芳賀宗惠話

備前・備中・美作・播磨の内を領し八十萬石なり。安土城下にて太閤木下藤吉と申時、高德公と藤吉御別懇に付、御屋も隣家にて高德公御息女御生被成候。其後藤吉養女に被成置候。其御養女を以て秀家へ御嫁娶に付、太閤の婿也。秀家活氣餘情ある人にて、朝鮮陣の時惣大將にて、諸將を朝鮮の野中にて五百人襲應なり。其時三の膳まで木具にて被出たり。

一、鼠に咬れたる時の療法

紀州大納言近習の小姓鼠に咬れ、只腫に腫て醫術も不叶、十死一生の時、或老尼云。古き壁土を湯にたて、洗へばよろしと云。其言の如くにしければ頓て本復せり。

一、荻田主馬二萬石被宛行事

越後糸魚川城主荻田主馬は、元糸魚川の人也。越前黃門被召

出、千石を領す。或時黃門より家康公へ爲御使、遠山甚五兵衛を被遣。甚五兵衛場敷覺の者にて、御目見の時其座にて、荻田主馬は我等能く知たる者也。何方に居ると思たれば越前に在るよし、彌其通るか御意。甚五兵衛其通りと御請す。何程知行は取らせらるゝぞ、壹萬石などにて居る者ではなきが、小身に居るか御尋。甚五兵衛、唯今千石被宛行候と云ふ。不便なる事哉、二萬石取らせられよと我等云ひたりといへ。役に立もの也。又人もなきと云ふほどの者ぞと仰にて、一度に千石より二萬石に成る。小男にて十二三歳のものほどにみえたりと。坂井與右衛門話

一、兼松又四郎、伊達政宗を打擲す

台徳公御時寛永初頃、家光公内藤左馬助宅へ被爲成、能興行還御の後諸大名酒宴の處、伊達奥州政宗小用に立候とて、兼松又四郎の膝に足あたりけるよし。扱縁の端にて小便せらる。其躰慮外にて又本の道を被歸、兼松へ何の會釋もなく被通ける所を、兼松扇子を以て政宗の頭を二三打て扇を棄て、脇刺を抜んとす。政宗も脇刺に手を懸る。何れも取付拔立させず。政宗大にせき脇刺の柄を握り、比異者、士が